

人が持つ「保つ力」とは

— 国木田 議員に聞く、教育と美しさの再設計

柿本 栗尾 (GENRON編集部)



教育政策において、近年じわじわと影響力を強めている政治家がいる。

国木田仁朗・衆議院議員（45歳）。

若手の論客として、道徳教育や家庭倫理を重視するスタンスを貫く一方で、メディア出演は控えめ。その発言はいつも静かだが、語られる言葉の奥行きには、なにか測りきれないものがある。今回は、教育と社会の「かたち」をめぐる、彼の思想を探った。

■「器格のようなものを、今こそ再び言葉にすべきだと思う」

— 先生は一貫して美しさという言葉を重ね視されていますが、どういった意味を込めておられますか？

国木田：美しさ、という少し抽象的かもしれませんが、私にとっては、かたちを保つ力、だと思っています。

どう生きるか、どう話すか、どう沈黙するか。そういうものに滲み出る姿勢というのは、誰しも本来持っているものの、今はそれが軽くなってしまった。

私はそれをもう一度、言葉にしたい時代

す。

編集後記

一貫して落ち着いた語り口だった。だが、ある人物の話になると一瞬、言葉が遅れる。その空白に、取材者として強く印象を残された。

彼の語る美しさは、抽象的な理念ではなく、誰か一人の記憶を経て凝固したかたちなのかもしれない。

そしてその形を、静かに、絶対に、崩さない。そんな覚悟が、政策の言葉にも——知らず、にじみ出ている。

国木田：（少し目を伏せて）…います。若い頃に出会った、ある人です。

振る舞い、話し方、立ち方。すべてが静かで、でも揺るがない。

当時はただ見惚れていましたが、後から気づいたのです。

あれは、何かに抗う強さだったのだと。

その人の在り方が、今の私にとっての判断の基準になっています。

■「ぶつからずに正すということも、政治の役割です」

— 現代の政治では、対立軸を立てることで注目を集めるスタイルも増えています。

国木田：そうですね。もちろん議論は必要です。ただ、私はあまり「ぶつかる」という言葉が好きではなくて。

人の思いというのは、正面からではなく、少し角度を変えた場所から整えていけるものだと思っています。

強い言葉よりも、崩れない姿のほうが周囲を変える力を持つ——私はそう信じていま

だと思っています。

（机の上に並べた書類を少し整えながら）

— ああ、これはあまり言うことでもないんですが……

資料の構成とか、スピーチの節数を18にまとめると、なんとなく落ち着くんですよ。意味はないんです。でも、そうすると妙に整理されて見えるというか……癖ですね。

■「私は、一人の人間を基準として持っている」

— そうした価値観を形づくるにあたって、影響を受けた人物はいらっしゃいますか？